

産学連携型ゼミナール活動におけるキャリア形成に向けての取り組みⅡ

— ソーシャルメディアを利用した「アクティブ・ラーニング」への試みに向けて —

Efforts towards Careers in Industry-University Cooperation Seminar Ⅱ

— Turn to the Trial to "Active Learning" using Social Media. —

秋吉 浩志

Koji Akiyoshi

【要 約】

本稿では、前稿に引き続き、社会人基礎力、ならびに入社後の人材を育成する即戦力的な人材育成までもが大学高等教育機関には望まれることとなった。そこで大学の教育ありかたについての一試論を述べたい。最近では「アクティブ・ラーニング」のように、学修者の能動的な学修への参加を取り入れる方法も導入され、その中で学外ゼミナール活動のような、社会貢献、地域貢献など、学外に目を向けた活動も注目を浴びるようになり、その中で、たとえばより学生ならびに学外の企業や組織などが連携した、問題解決型の実践的な教育方法などが求められている。

そこで、九州情報大学のマーケティングゼミナールにおいて「産学連携型ゼミナール」の運営を通じてどのように学生を、学力も含めて、まず、社会人基礎力、人間力を養成するの試みについて、前回同様 2014 年度の取り組みを中心としてその活動の報告並びに今後の課題や問題点について述べたいと思う。その中で重要なことは前稿も強調したが、一般的なインターンシップのような社会人経験等を体験するのだけでなく、産学連携のもと、主に企業や団体、組織との産学連携を中心としたよりふみ込んだ事業を目的とする「ソーシャルメディアミックス事業」や今回はさらに社会貢献型「イベント事業」での試みなどを紹介し、産学連携事業型としてのゼミナール活動のなかで社会人力と人間力ならびに学力を同時進行的に実践的な養成をする重要性をあらためて主張したいと思う。

さらに、その中で今回はアクティブ・ラーニングの内容がこの産学連携型ゼミナール活動とどのように関わっていくのかを若干検討するものでもある。

キーワード: 産学連携、産学連携型事業、キャリア形成、インターンシップ、ゼミナール、アクティブ・ラーニング、ソーシャルメディア、ソーシャルメディアミックス、マーケティング

1 はじめに

前稿でも述べたが、最近の大学教育は、現代の社会環境のダイナミックな変化に対して順応したより多角的な教育が求められるようになってきているといえよう。それは、大学における学問と研究だ

けに頼る教育内容のみならず、社会経験も含めた社会人教育や人間力向上目的を取り入れた講義内容、ゼミナール活動もそのような社会人力や人間力を求めた総合的な学修方法のダイナミックな変化が求められている。

とくに、一般的な講義とは異なり専門的、個人

対応的な演習やゼミナール活動はその後の学生の就職等における将来の職種にもおおきな影響を与えるため、より社会人教育や人間力を磨くための学習と教育内容の対応等が重要になっているといえよう。それをにらみ、最近、能動的な講義やゼミナールがアクティブ・ラーニング等を中心とする教育内容に移行し変化している大学がここ数年増えてきている。

また、大学教育のなかで最近の学生に乏しくなっている社会人育成にも力を入れる大学としての価値が求められているのである。そして現代ではその学力と社会人力や人間力それらすべてが求められていることを忘れてはならない。

そこで本稿では、そのような大きな動きの中で、現在取り組んでいる九州情報大学マーケティングゼミナールの産学連携同事業型の「産学連携型ゼミナール」の取り組みについて再度触れ、その取り組みを後述のアクティブ・ラーニングの関連性を模索しながら、今後の有効性と展望について述べてみたいと思う。

なお、前半では、社会人教育に必要な諸条件をレビューし、そして現在取り組んでいる産学連携

ゼミナールがアクティブ・ラーニングのどの部分で生かされているのか、そして後半ではその産学連携型ゼミナールの主に 2014 年度における九州情報大学におけるマーケティングゼミナールでの取り組みを紹介し、最後に今後の問題点と展望について若干述べてみたい。

2 社会人基礎力について

近年、社会人基礎力に関する議論が活発化し始め、その基準は検討が始まったばかりであり、定まっていないのだが、企業等が求める人材としての社会人力が求められ、研究機関である大学の役割もその分野での活発な議論が行われている。

経済産業省は平成17年7月から「社会人基礎力に関する研究会」（座長：諏訪康雄法政大学大学院教授）を開催し、我が国の経済活動を担う産業人材の確保・育成の検討を進め、その報告書の中では、職場等において基礎学力や専門知識に加えコミュニケーション能力や実行力など、人との接触の中で仕事をする能力が重視され、高校生、大学生などの若年層においてはそうした能力が低下していることを指摘している。

そこで、大学と職場等で求められる能力（社会人基礎力）を明確にするとともに、その能力を意識的に育成・評価していくための社会全体による産学連携などの新たな枠組みづくりが急がれているのは周知のことであろう。

現在、経済産業省が提示している社会人基礎力として、以下に示す「3つの力と12の要素」として **図表1** のように体系化されて以下のように紹介している。

①前に踏み出す力Action（アクション）：失敗しても粘り強く取り組む力

□1 主体性：物事に進んで取り込む力

□2 働きかけ力：他人に働きかけ、巻き込む力

図表1：社会人基礎力3つの力と12の要素

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じることもあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

出典：経済産業省『企業の「求める人材像」2007
－社会人基礎力との関係－』2 ページ。

③) 実行力：目的を設定し確実に行動する力

② 考え抜く力 Thinking（シンキング）：問題意識をもち考え抜く力

□1) 課題発見力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力

□2) 計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力

□3) 創造力：新しい価値を生み出す力

③ チームで働く力 Teamwork（チームワーク）：目標に向けて他人と協力する力

1) 発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力

2) 傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力

3) 柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力

4) 情況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

6) 規律性：社会のルールや人との約束を守る力

7) ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力

以上のように総合的な観点から社会人基礎力は三つの能力からなると説明している。

そこで、それを実現するための手法として、経営学のビジネスゲームや演劇作品を用いた英文学の学習のような、文科系学部でも専門的な基礎知識が求められる内容では、一つの学習形態として課題解決型のアクティブ・ラーニングが導入され、社会人基礎力を身につけるための基礎演習が行われ始めている。

3 社会人基礎力とアクティブ・ラーニング

「社会人基礎力」とは何なのかの概要を説明したが、その社会人を養成するための手段の一つの試みとして、大学の教育現場では、前述のようにアクティブ・ラーニングという教育手法が注目を集めている。

アクティブ・ラーニングについてその用語を何度となくここでは引用してきたが、ここではそのアクティブ・ラーニングとは何かを若干整理してみたい。

アクティブ・ラーニングとは文部科学省の用語集によれば「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と定義づけている。

上記内容の具体的な実践にあたっては、各大学等によってさまざまな取り組みが行われていて、それが、将来に向けたキャリア教育へとつながっていく基礎的な教育方法であることがおおむね言えるだろう。

図表 2 は、ゼミナールにつながる演習型授業におけるアクティブ・ラーニングで検討されている内容である。

学習プロセスや学習を高める工夫の4つのポイントは、専門ゼミにおいて、マーケティングゼミナールで体験する社会との実践的ゼミナールにおける学生の基礎的学力を身に付け、その後の実践力を生かすための大事な要素になると思われる。

そこにおいては、その学力と社会人力をつけるための実践力とのシステマティックな関係性の検討が今後必要になるだろう。

その部分は今後さまざまな分野での実践的な事例を含めての情報の蓄積が重要なように思われる。

今後はそのアクティブ・ラーニングで培った学習能力を本学マーケティングゼミナールの産学連携実践型ゼミナールにどう生かしていくのかが今後の課題になってくるであろう。

4 マーケティングゼミナールにおける産学連携型ゼミ活動の実践例

さて、前記のような諸問題解決型の実践ゼミナールとして、本学のマーケティングゼミナールが行っているゼミ運営の事例を再度紹介したい。

図表2：演習型授業におけるアクティブ・ラーニングで検討されること

学習プロセス	学習の質を高める工夫			
	高次の学習法	他者の視点強化	授業外サポート	カリキュラム・サポート
情報収集／インタビュー・質問紙調査・実験／製作／野外観察／グループ・ディスカッション／グループ学習／プレゼンテーション (PowerPoint・ポスター)／教員・他の学生との質疑応答	問題発見・発想法／思考の整理法／要約の仕方／論・ストーリー構成の方法／ジグソー法(教育学)	授業外での学生同士の議論を可能にすべく、電子掲示板、ブログなどの電子メディア・システムを導入／伝える相手を意識したシミュレーション	電子掲示板、ブログなどの電子メディア・システムを導入(左に同じ)／学習支援センター組織(工学)／図書館、自習室、実験室などの24時間開放	初年次科目と高学年PBLとの接続(歯学)／他の専門科目と連携したカリキュラム再編成(理科教育)

(注) ある専門領域に特化した内容が記載される場合にはカッコ内にその分野を補足している。

出典：溝上慎一『アクティブ・ラーニング導入の実践的課題』276ページ

前稿においても紹介したが、本学のマーケティングゼミナールでは、主にソーシャルメディアを利用したマーケティング戦略を検討し、組織として運営している数社や組織とインターネットクラウドの USTREAM 生放送等、企業が主催しているイベントへのボランティア参加、更にはゼミナールが中心となって、学園祭においてコンサートの事業を行っている。

2014年11月現在、下記の4つの企業や組織と連携して主にソーシャルメディアを利用したソーシャルメディアミックス事業、並びにイベント事業を行っている。

- ①株式会社フラウ
- ②博多アイドルグループHR (エイチアール)
- ③福岡県美しい街づくり協議会 (福岡県)
- ④八女市上陽町における九州北部災害被害地域の取材と情報発信活動
- ⑤九州情報大学学園祭特別企画「第3回アイドル学園祭」など

上記企業ならびに組織の中で、2011年から継続的に行っている①～④の事例について若干最新の内容を含めて説明したい。

(1) 株式会社フラウの USTREAM 放送連携事業

株式会社フラウは1993年創業、2014年21年目になる子育て支援情報提供を中心とした、主婦向け雑誌「子づれ DE CHA・CHA・CHA」な

ど多くの子育て支援関係の雑誌や本を出版している企業である。

その企業のマーケティング戦略の中でのソーシャルメディア事業の一環として、USTREAM 放送の番組企画・制作等をゼミナールで、引き受け、番組表作りなど放送関係の作業をすべて学生が行っている。

また、企業側の担当者とも学生が積極的にコミュニケーションをとり、定期的に各種

ソーシャルメディアをどのように利用するか、特に複合的に各種メディアをミックスさせてプロモーションを行うかの担当者会議を月一回行い、積極的な番組作りを行っている。とくに、生放送を録画したものを動画サイト You Tube にもアップロードをしている。

現在は、福岡市 JR 博多駅構内の「HAKATA SISTERS Cafe」サテライトスタジオにて、USTREAM 放送事業を隔週で行っており、企業のプロモーション活動の一端をゼミナールで請け負っている。

(2) 博多アイドル HR(エイチアール)のソーシャルメディア連携事業

福岡市博多区に本社を持つ、モデル事務所有限公司オフィスアーツに所属している博多アイドル HR (エイチアール) は福岡市を拠点とし、2010年から活動しているアイドルグループである。

2011年今後の新しい事業展開として、ファン獲得やCD等のソフトなどの販売に向けたおもにインターネットを中心としたプロモーション戦略において、ソーシャルメディアを利用したプロモーション活動を重要視し始め、その各種ソーシャルメディアを利用した、ソーシャルメディアミックス戦略を実践することを本学マーケティングゼミナールと連携することを決めた。会社の予算上現状ではスタッフの確保が困難であるため、ゼミの学生の研修の場として、各種ソーシャルメ

ディアを利用して、本学マーケティングゼミが、事業を請け負っている。

コンテンツ提供は HR（エイチアール）で、制作は本学マーケティングゼミナールが主体で運営している。

（3）福岡県「福岡県美しいまちづくり協議会」USTREAM 放送連携事業

「福岡県美しいまちづくり協議会」は 2007 年 2 月に設立され、主に福岡県の美しいまちづくりを進めるために、まちづくりを行っている団体や事業者、大学などの研究機関、県・市町村が一緒になって情報交流活動などを行っている。

福岡県内での学習会や、体験体感ツアー、福岡県景観文化展（絵画の募集）、福岡県美しい景観選（写真の募集）、福岡県景観大会などに取り組んでいる。

事務局は福岡県建築都市部都市計画課にあり、景観文化展・美しい景観選・景観大会等の実施事務局は「NPO 法人男女・子育て環境改善研究所」（平成 24 年度より）が行っている県の事業を請け負っている。

そのなかでマーケティングゼミナールは、福岡県の美しい景観を紹介する USTREAM 生放送を、連携してボランティア活動として隔週放送を行っている。

（4）八女市上陽町における九州北部災害被害地域の取材と情報発信活動

2012 年 7 月 14 日（土）に発生した、九州北部を中心とする「九州北部豪雨災害」。その豪雨災害の爪あとは、その後徐々に取り上げられることもなく、現地の状況を伝えることは少なくなった。そこでマーケティングゼミナールでは、その後の状況、とくに復旧状況を定期的に伝えるためにソーシャルメディアを利用して、行うことにしている。

現地を学生と一緒に視察、インタビューを行い積極的に情報発信を行っている。

とくに、八女市上陽町にある「ほたると石橋の館」を中心とした、現地の復旧の様子に焦点をあて、毎年 6 月に集中するほたる見物の様子とし

て現状を報告することで、自然と災害に関する関心を薄くさせないための情報発信を行っている。

現在、地域情報センターのブログにて報告、You Tube にて災害状況の様子を動画でアップロードを行っている。今後も各種ソーシャルメディアを利用して災害後の復旧の様子を情報発信していきたいと思っている。

ほかにも現在ゼミナールは USTREAM の 2 番組合計 4 番組の企画・制作にも参加し、2015 年度はさらに 1 番組の企画・制作番組の依頼を受け、現在内容の検討中である。

以上が、現在ゼミナールと産学連携をとりながら、実践型として運営しているマーケティングゼミナールのプロモーション事業の一部である。

5 おわりに

前稿でも紹介したが、この産学連携事業を始め、実際活動の中で、前稿に引き続き、学生に多くの変化が生まれ、それはより具体性、実践性を学生が体験できることとつながっているものと思われる。

その変化の幾つかを再度取り上げてみたい。

①この連携事業を行うことによる責任を与えることによって、学生個人の仕事に対する自主性や責任感が生まれた。これは、社会人基礎力における考える力、前へ踏み出す力につながっていると思われる。

②企業側との打ち合わせや電話等によってコミュニケーションをとることにより、社会人とのコミュニケーション力が格段に向上。これも社会人基礎力における「考える力」につながっていると思われる。

③インターネット技術、ならびにマーケティング戦略について学生個人があらためて学習する意欲がわき、専門性のある本や論文等を読むようになり、その学習効果が連携事業のスキルアップに反映されるようになってきた。これは、アクティブ・ラーニングでの基礎学習力があれば、自分で主体的に行動ができ、社会人基礎力で提言されている「前へ踏み出す力」につながっている。

④就職活動における面接試験やプレゼンテーション試験などにこの経験を生かして、目標である就職につながる学生が現れてきた。

⑤3年生からの専門ゼミでのこの連携事業への参加によって、先輩後輩の仕事のつながりやゼミ生同士の情報共有や教育意識も向上した。これは、チームで働く力につながっている。

このように、今回は社会人基礎力の項目にあわせて、学生の変化がそれに対応するかのように行動することが徐々に見えるようになってきた。

現在、さまざまな手法が試されるアクティブ・ラーニングによって、社会人基礎力の項目におけるそれぞれの力を発揮するための初年次教育等の実践が望まれる。その力を早くから習得しておく、ゼミナールに入った時にはすでに、それらの能力を少なくともある程度発揮できることになり、さらなる社会人基礎力のレベルアップも望まれよう。

つまり、産学連携型ゼミナールで行動するときにはすでに、少なくともある程度の社会人基礎力を持ち、さらに積極的にお互い責任をもってコミュニケーションをとることで、より高いレベルでの社会人基礎力向上につながっていくと思われる。

さいごに、本稿では、前稿の「実践的社会経験を積む産学連携事業型ゼミナール」は実際の社会人力形成ならびに学問的スキルも同時に養うものとして、より効果は高くなると論じてきた。しかし、大学教育における低学年層から、前記のようなゼミナール運営に向けてのアクティブ・ラーニングを効率よく実践することができれば、さらなる、学問的分析力、思考力の向上もみられると思われる。

今回は、ソーシャルメディアを活用した「実践的社会経験を積む産学連携事業型ゼミナール」において、現在注目されている「アクティブ・ラーニング」との関係性の可能性について若干述べてきた。

「産学事業連携型ゼミナール」の内容を各学生にさらに責任負担を持たせた、「実践的社会経験を積む産学連携事業型ゼミナール」として活動するならば、実際の社会人力形成ならびに学問的ス

キルも同時に養うものとして、より効果は高くなると思われる。そこには、アクティブ・ラーニングの経験が高ければ高いほど、社会人基礎力を養う部分においては、大きな可能性をもつ、効果が期待できる。

しかし、今回述べた取り組みは、前稿でも述べたように、まだ入り口の試験段階としての出発点である。今後それぞれ企業や組織などの目的などによって、その社会人基礎力養成プログラムは大きく変化するであろう。

また、マーケティング戦略におけるプロモーション戦略の一部として拡大、成長してきたソーシャルメディアといわれるインターネットクラウドツールは非常に多岐に亘っており前述の目的に沿って、その事業戦略や計画を企業や組織などと十分に検討し、選択ならびに組み合わせながら事業をおこなって行かなくてはならないと思われる。

そこには、アクティブ・ラーニングのような社会人基礎学力を養う、基本的な学修システムが今後重要になってくると思われる。

今後、本学独自のアクティブ・ラーニングに向けた教育システムの確立と、その確立によって、社会人基礎力の養成に多大な影響力を与えながら、いずれ社会人として社会に出て行く学生の成長をさらに促進するシステムが構築される可能性を秘めている。

今後の課題としては、そのあらゆる可能性に対応できるアクティブ・ラーニングのシステム作りの早期の確立を望みたい。

謝辞

今回の研究ノート作成において、株式会社フラウ様、有限会社オフィスアーツのスタッフの皆様、福岡県美しいまちづくり協議会事務局、八女市上陽町「ほたと石橋の館」辻田理恵様のご協力を得て作成することができた。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 荒井 誠、野口孝文、草苺敏夫、高橋剛、梶原秀一、千田和範、森太郎、大槻香子『産学連携による実践型人材育成事業の成果と今後』釧路工業高等専門学校紀要、44、5-8、2010年。
- 2) 奥山雅則『実践的研究教育としてのインターンシップの取り組み』大阪大学、工学教育、54(3)、128-131、2010年。
- 3) 大橋健治『アクティブ・ラーニングの試み』筑紫女学園大学、筑紫女学園短期大学部紀要、5号、217-227、2010年。
- 4) 河合塾『大学のアクティブラーニング調査報告書』2010年度。
- 5) 北岡康夫、森勇介、根岸和政『産学連携による社会人基礎力の育成』工学、工業教育研究講演会講演論文集、平成20年度、738-739、2008年。
- 6) 新國三千代『社会情報学部によるプロジェクトタイプの実践型インターンシップの試み』社会情報、16巻1号、101-106、2006年。
- 7) 末岡英利『大学教育と産学連携による人材育成-寄付講座活動の果たしてきた役割とこれから』日本船舶海洋工学会誌47、38-41、2013年。
- 8) 須永一幸『アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題-activeness概念を中心に-』関西大学高等研究、1号、1-11、2010年10月。
- 9) 長谷博行、高橋謙三、鈴木敏男『産学連携による長期インターンシップの教育的効果：福井大学工学研究科における産学連携による実践型人材育成事業』工学・工業教育研究講演会講演論文集、112-113、2009年。
- 10) 竹中啓之『インターンシップと大学教育』鹿児島県立大学 商経論叢、第50号、17-35、2000年。
- 11) 松行彬子、安田利枝、小澤美弘『嘉悦大学における産学連携によるインターンシップ-コラボレーションが育むキャリア教育-』嘉悦大学研究論集、第46巻、第2号、通巻84号、105-122、2007年。
- 12) 溝上慎一『アクティブ・ラーニング導入の実践的課題』名古屋高等教育研究、第7号、271-287、2007年。
- 13) 柳田純子『産学共同プロジェクトの実践を通じた大学生の協働における意識・行動の変化と統合-生涯キャリア発達の観点から-』東京情報大学研究論集、Vol9,No2,39-51,2006。
- 14) 柳田純子『産学連携による課題解決型学習を通してのキャリア形成支援:学習過程を推進する際の大学教員の役割』東京情報大学研究論集、Vol16,No2, 15-31,2013年。
- 15) 経済産業省『社会人基礎力に関する研究会-「中間とりまとめ」-』2007年3月。
- 16) 経済産業省『企業の「求める人材像」2007-社会人基礎力との関係-』2007年3月。
- 17) 文部科学省「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ」2013年8月。
- 18) 文部科学省用語集
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf